9-3 内的な関連から疎外された、それだけとして見ればばかげたものである現象形態のなかで、彼らは水中の魚のように気安さを覚えるのである。

常識が不合理と見るものは合理的なものであり、常識で合理的なものは不合理そのものであるということがあてはまるのである。

「剰余価値の一部である貨幣地代――というのは貨幣は価値の独立表現だからである――の土地にたいする割合というものは、それ自体ばかげており不合理である。なぜならば、ここでお互いに計算の基礎になるもの、すなわち一方の側にある一定の使用価値、何平方フィートかの地所と、他方の側にある価値、詳しくは剰余価値とは、比較できない量だからである。……とはいえ、一定の経済的諸関係がそのなかに現われそのなかに実際に総括されるところの不合理な諸形態の媒介は、日常取引でのこの諸関係の実際上の担い手たちにはなんのかかわりもないのである。また、彼らはそのなかで動くことに慣れているので、彼らの理性はそれにたいして少しも衝突を感じないのである。完全な矛盾でも、彼らにとっては少しも不思議なところはないのである。内的な関連から疎外された、それだけとして見ればばかげたものである現象形態のなかで、彼らは水中の魚のように気安さを覚えるのである。ここでは、ヘーゲルがある種の数学の公式について言っていること、すなわち、常識が不合理と見るものは合理的なものであり、常識で合理的なものは不合理そのものであるということがあてはまるのである。」（大月版『**資本論**』⑤ P998B1-999B6〉

※〈ことば〉「30-19」にも掲載。